研究の栞

日本古建築研究の栞（第三十一回）

天沼俊一

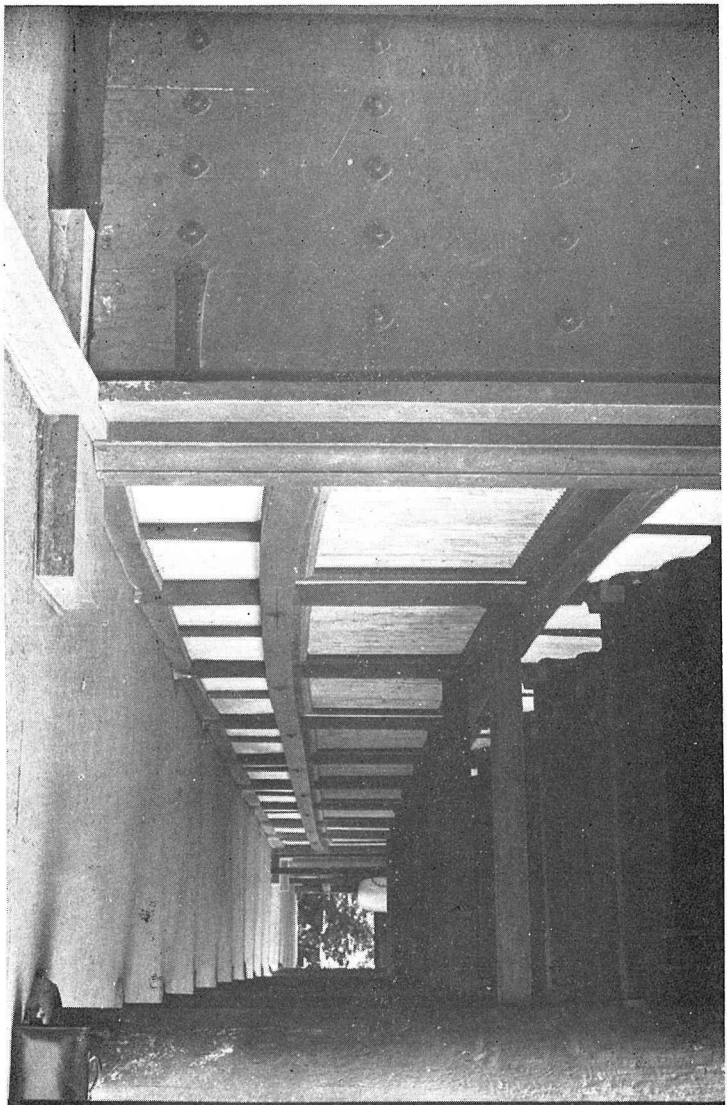
第三十四　窓（上の下）

江戸時代

また前代同斷といつてよろしい。

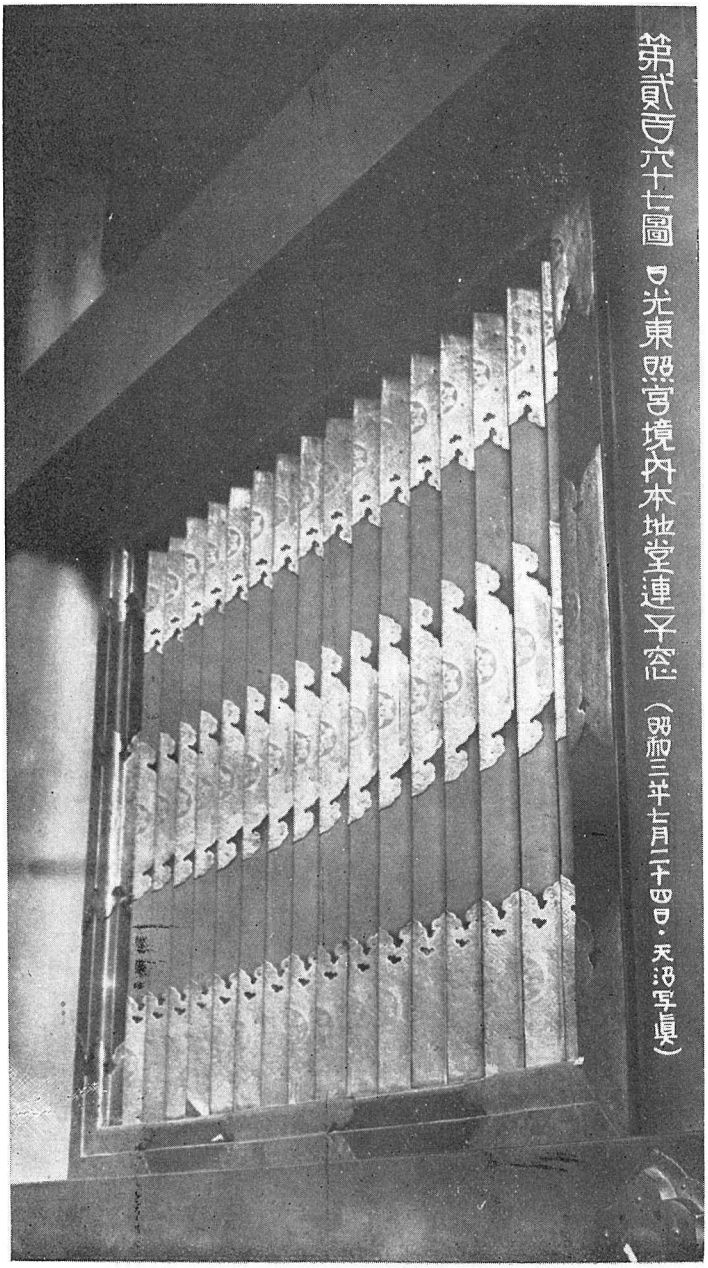
これは古い時からのことで、敢て江戸時代に限らぬが、中門などに歩廊がとりつくとき、其接續を工合よくするために、少しく上に反らせる。故に總ての水平材は反る、從て連子窓も反る。其反り方は第二六五・二六六圖の如く、窓の上下の框が反るのである。だから窓丈けとりはづしてみると隨分變な形にも見えやうが、全體一所のときは形が中々よろしい。

連子窓は單廊の場合に外側の柱間についてゐるときよりも、複廊の時中の間についてゐる方が餘程よく見える。第二六五圖は複廊の例で、西側の一部を北側よりとつた寫眞である。遠方の提灯のでてゐるのは慶賀門、近い方のは清淨門、其間の歩廊は、門へ取つきの所で長押も窓も反らしてある。斯樣に反つてゐるから、之れで接續の工合がいゝのである。尙ほ序ながら南歩廊の東の方は高地になつてゐるので、地形に從て歩廊も上つてゐ



第百六十六圖　宮城大社春日神社西側複廊上部
（昭和三年五月十八日・天沼写真）

第貳百六十六圖・東大寺大佛殿歩廊一部・（昭和三年五月十八日・天沼写真）



第貳百六十七圖　日光東照宮境内本地堂連子窓（昭和三年七月二十四日・天沼寫眞）

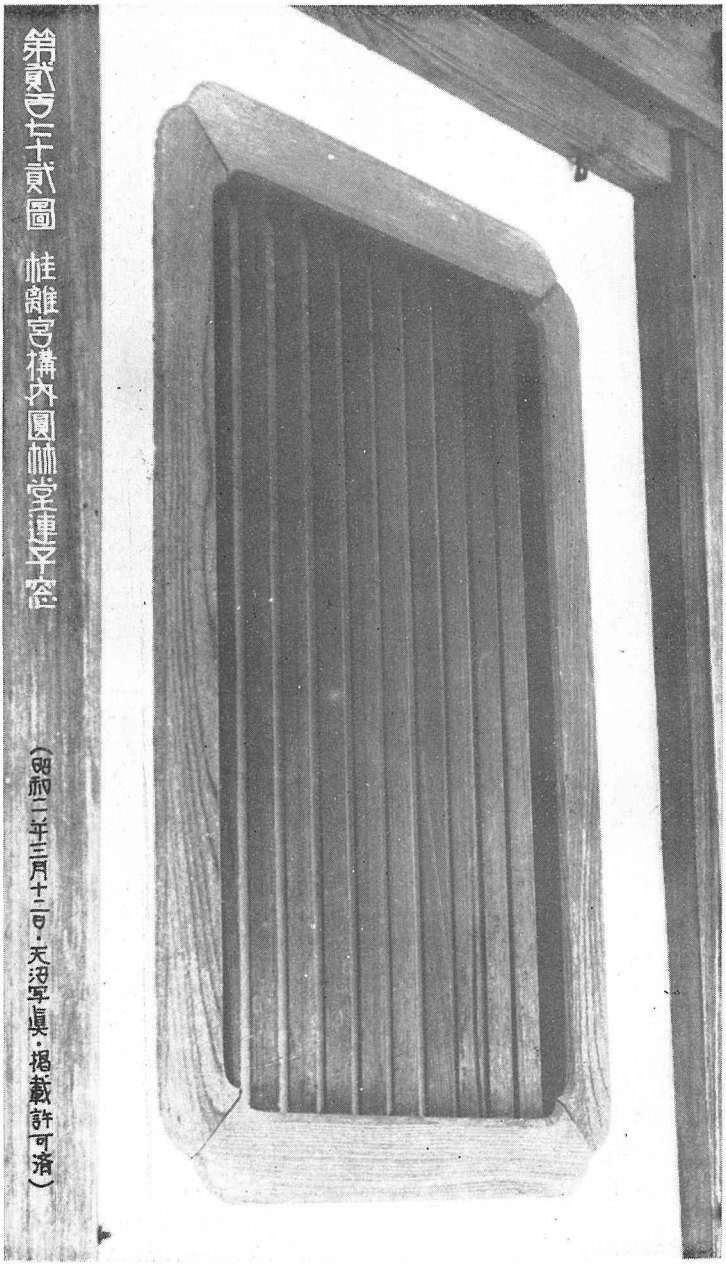
第貳百六十八圖・日光東照宮上社務所後面中央周連子窓・(昭和三年七月二十日　東京写真工業)

第貳百六十九圖
日光東照宮廻廊内より北方をみる
（桑原写真・昭和三年七月二十四日）

第四十圖　同　内陣　無量光院殿

（明治三十三年十月の修理、天沼俊一氏撮影）

第貳百七十二圖　太山寺（兵庫縣明石郡）塔婆初重言連子窓部（昭和三年六月二十六日・天沼寫眞）



第貳百七十貳圖　桂離宮構内圓林堂連子窓

（昭和二年三月十二日・天沼寫眞・掲載許可濟）

るが、この場合に總ての水平材は斜であるから、窓も同じく上下の框が斜になつてゐる。故に窓全體はいはば菱形である。この種の窓は主要な材料の形に從て、其場所により自由に變化し得るので甚だ都合がよろしい。

贅澤なのになると、各子に飾金具を打つ樣になる。例へば第二六七圖は日光東照宮藥師堂（本地堂）窓の一つであるが、綠靑塗の子を一々立派に毛彫をした金銅飾金具を上中下三所に打つて裝飾してある。勿論黑漆塗の框にもあるが、これは既に前代にもあつたのである。けれどもこの窓では、總てが黑と綠と金とで光つてゐるから大變に綺麗で、あたりの柱や長押は朱漆だから、愈よ以て美しく見える。

第二六八圖は明層ではないが、明層紛ひに頭貫の直ぐ下に窓を造つたのである。東照宮の上社務所といつてゐるが、神佛混淆時代は護摩堂であつ

た。其護摩堂の後面、廻廊の方に面して圖の樣に窓を設けたが、餘り大きいのは不用と見え、長押迄にのばさず其上の方に貫を其間に丈けいれて、とにかく平たい窓をおさめてある。後ろの方の殊に廻廊との間の狹いところで、どこからも見えぬのに、大分念入に飾つてある。但し窓其物は極めて平凡である、たゞこんな所へこんな風にして用ひたといふ例に示したのである。

第二六九・第二七〇の二圖は、江戸時代の代表的廻廊と其連子窓とを見せるために、これも亦同じく日光東照宮の西側廻廊の一部と、其一番奥の突き當りの窓とをだしたので、これを前號に掲げた第二三九・第二四〇圖と夫れ夫れ比較すると、千年の差のために、そこに隨分の差が見出されるのである。

（一）土間と朱漆塗の光つた板敷の床、（二）エンタシス丹塗の柱と唐樣粽朱漆塗の柱、（三）丹塗の薄長押

と極彩色の厚い長押、(四)間斗束と蟇股、(五)合掌と太瓶束、(六)虹梁の反りと形、これ等は何れも頗る興味のある比較ができる。今こゝに述べるのは連子窓で、四角な框に間隔の廣い細い子と、几帳面の樣な面取で菱形の間隔の狹い太い子と、丹塗の框に綠青塗の子と、黑漆塗金銅飾金具打の框に同じく黑漆塗の子との比較も亦、同樣に面白いものであらねばならぬ。

此の場合窓は柱間の廣狹に應じ、適宜に其大さを變へてゐる、何にしろ床は朱漆塗で光つてゐるから、その面へ窓が――詳しくいへば子の間から入つてくる光線が――反射して美しい(第二六九圖)。併しながら第二六九圖に於いて、突き當りの間の中央の柱はない方がいゝ樣に思ふ、幅の狹い背の高い窓を二つおくより、一間にして窓も一つの方が廻廊も幅が廣く見えるし、餘裕があつてよろしいと思ふ(第二七〇圖)。

昔し――これは廣い意味の昔し――は建築等に於いては、全體と細部との比例をよく考へてつくつたから、さう變な割合なものはなかつた。然るに後世になつてくると、技術者の程度が下落したために、細部の比例なんか大して問題にしなかつた。つまり夫れが建築全體に比べて調子がとれやうがどれまいが、其邊はいゝ加減にしたのが多くなつてきたのである。連子窓もこの例に洩れず、框の割に大きな子を用ひたりしたゝめ、感心のできかねるものができた例はいくらもある。まことに氣の毒ではあるが、播磨の大山寺塔婆の窓の寫眞を第二七一圖にだして說明をする。

この窓は左右と上框とには小さい几帳面をとつた框をつくり、下は左右框の面內におさめたたゞの四角な木で、內には大變に太い盲連子が入れてある、さうして圖にも見えてゐる樣に、山の頂上は下框の外面からはみ出してゐるから、見上げた

場合には下框からある間隔に、各連子子の木口が二等邊三角形にでてゐる醜態を演じてゐる。

或はまた上下左右の框が四隅に於いて内方に茨をもつてゐる――かういふのを木瓜型といつてゐる樣である――のがある。勿論かういふのは新しいのに多いのである。其茨は框の内側のみで、外側は普通の如くなつてゐる場合(紀伊道成寺三重塔)と、内外共にさうなつてゐる(桂離宮内圓林堂)のとあるが、双方共大していゝ感は起らない。木瓜型卽ち四隅が内方に茨をなしてゐるのは、桃山時代の柱にもあるから(近江石山寺紫式部源氏間柱)、窓框にも前代からあり得る筈であるが、まだ見出さぬから、みつける迄は當代からとしておく(第二七圖)。

京都府綴喜郡八幡町官幣大社石清水八幡宮廻廊及本殿闕伽棚連子を第二五五圖に示しておいた。別に變つた點もないが、江戸へ入つても眞四角な連子が用ひられたことが知れると同時に、框の斷面が硬く、昔しのゝ樣に圓滿な氣持のいゝ輪廓でないことが判るであらう。

次に私は連子窓の最も變つた一例を紹介するため、弘前市にある最勝院五重塔(寛文八年)第二重連子窓の詳細圖をだしておく(第二五四圖)。大概のほこんな場合は、横がはなれて上下がついてゐるか、若くは上下左右とも離れてゐるのに、これは左右がついて上下が離れてゐる。これ丈けでも既に他と異つてゐるのに、框内には連子子なく、中央に格狹間型の輪廓をとり、其内に盲連子を入れてある。だから外觀は從來と全く異つてゐる。

尤もこの四角な框の輪廓がなくて、ただ格狹間の樣なものゝ中に連子を入れたのなら、東京郊外池上本門寺五重塔(慶長十三年)初重脇の間(後出)「又は京都市敎王護國寺五重塔(寛文十八年)初重佛壇羽目板にあるこのうち前者は窓といへば窓であらうが、今は記さない。最勝院のは、計劃者の眞意は判らぬが、想像してみると、普通の連子窓にするつもりでありながら、さうしないで獨創的意匠をだして(?)

こんなものにしてしまつたのであらう。そこが變つてゐると思ふのである。

最後に江戸時代の木割法による連子窓の框及び子の大さのだし方を雛形本から引出しておく。第二五五圖右上のが夫れで、連子は菱形であるが、其菱の形のだし方を圖解してある。卽ち長邊が短邊の二倍に當る矩形を畫き、スミヨリスミヘツルヲヒキ（對角線を引き）、フリツケヲカネノテニヒク（其中央を直角に二等分し）、其線が長邊と交りたる點と、對角線を引き出した頂點とを結びつける時は、菱形ができるから、この菱形を子の形に用ひよ、といふのである。框の前面等も示してあるが、どこ迄も規則づくめでやつてある所が面白い、けれども形は決してよろしくはない。これ等になると、石淸水のなどより一層角張つてゐて、如何とも致し難い形である。

＊　＊　＊　＊

連子窓は、大概は貫の間とか、長押の間とか、又は貫と長押との間とか、さういふ所に上下は挾まれ、左右は多く框の外に小壁——漆喰壁と板壁とになつてゐるときがある——があつて、其次に柱があるのであるが、どうかすると左右の框を缺き、從て小壁もなく、ぢかに柱間に全部を入れたのがある（法隆寺食堂、海龍王寺西金堂）。さういふ場合は、四方に框のあるのに比べて幾分不滿足に見えるが、それでもまだよろしい。其最も變なのは四方に何もなく、壁の中に浮いてゐる樣に取付けたもので、古くは宇治上神社本殿覆屋（第十四卷第一號第二四一圖）、大和の法花寺本堂（慶長六年）等、江戸時代のものでは、前記桂離宮圓林堂の例である。

＊　＊　＊　＊

當代の連子は、其框が愈よ角張つてきたから、形は大してよくない。其入念のものに在りては框にも子にも金銅の飾金具を打つ。時には框のみを普通の如くに取つけ、其中央に格狹間型の輪廓内に連子を入れたのがある（弘前市最勝院塔婆）。子は最も多く綠靑塗なるも、稀れには黑漆塗のもあつた（日光東照宮廻廊）。

（昭和四年二月二十八日稿了）